代々木病院の理念
ヒューマニズムにもとづく医療・介護の実践

くらしと健康

発行　医療法人財団東京勤労者医療会　１部60円
〒151―0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷１―30―７
ＴＥＬ(3404)7661
E-mail address　yo_sosiki@tokyo-kinikai.com
友の会会員は会費に購読料がふくまれています。

医療・介護の現場から

やっぱり自宅がいいね！

なにがあっても一生一緒だよ

千駄ヶ谷に住む石井眞次さん（87歳）はパーキンソンを患い、胃ろうを造設、尿管留置という状態で代々木病院を昨年7月に退院となりました。自宅に帰れた安心感か顔色もよくなり、元気で安定した生活が送れるようになりました。そんな石井さん宅を1月8日訪問し、奥さんの良江さんに話を聞きました。（編集部）

眞次さんは代々木病院を退院して7ケ月。現在、良江さんと千駄ヶ谷の自宅で2人暮らしです。時々、娘さん（長女）が来て手伝ってくれます。胃ろうへの流動食の注入方法も娘さんと2人で覚え、不安を抱えながらも、何とかできるようになりました。娘さんが来る時は食べ物を運んでくれたり、薬を取りに行ってくれたりして本当に助かっています。

良江さんの眞次さんへの介護は毎朝5時40分起床、6時30分胃ろうへ流動食の注入から始まります。外に出る事もままにならないけど、娘さんや往診の先生、訪問看護師、ヘルパーが支えてくれるから頑張っていけるといいます。

本当に辛かったのは、15年ほど前、（眞次さんが）70歳を過ぎてから心臓バイパス手術を受け、術後2週間ほど意識不明が続き、「心臓は動いていても反応がなかった」時といいます。毎日の献身的な介護の秘訣は「夫は若い時、よく子供を遊びに連れて行ってくれたのよ。楽しい思い出が沢山あるわ、それがあるから頑張れるの」と笑います。

退院後、眞次さんの顔色もよくなりとても元気になったそうです。

毎日の生活のなかで良江さんが一番大事にしている事は眞次さんへの、声かけです。声をかけると、時間がかかっても「大丈夫」「さようなら」「ありがとう」など短い言葉が返ってくるそうです。取材中も良江さんが話しかけると眞次さんは顔、手、足を大きく動かし問いかけに答え、足を動かすリハビリにも力が入ります。「どんな事があっても一生一緒だよ」と言いきる良江さん。良江さんの一言、一言が胸に染みました。

ヘルパーさんとジャンケンでリハビリ中

奥さんの良江さん

訪問看護のちから

石井さんの在宅療養を支える代々木訪問看護ステーションの小林隆子所長に訪問看護の役割について語っていただきました。

これまで石井さんには往診、訪問看護、訪問介護が入り、体調管理、自宅介護のサポートをしてきました。看護師は、体調管理、排便介助、カテーテル類の管理、皮膚のトラブルへの対応、痰の吸引と口腔のケア、胃ろうから栄養剤を注入などをしています。

☆

取材記事にもありましたが、退院当初は声をかけても返事はあまりなかった石井さんですが、この頃では会話もでき笑顔もみられとても穏やかに生活されています。介護する奥さんはとても大変ですが、住み慣れた家で家族と過ごす安心感は心身の安定にとても大きな力があると、日々感じています。

☆

訪問看護師は、体調管理とご家族ではできない看護を要望に沿って行うことで、在宅で療養生活している方が、安定した状態でより快適に生活ができるようにお手伝いをしています。体調管理をすることで、何か変化があった時には迅速に対応できます。

☆

看護内容は、石井さんの受けているような医療処置だけでなく、入浴介助、弱った足腰を回復させるためのリハビリ、飲み薬の管理、排便の介助、療養指導など多様です。また、処置をしながら、介護している方の悩み、不安などをお聞きすることも多いのですが、これもまたとても大事な看護と思っています。

☆

在宅生活は、1日24時間365日支えているご家族がいることで成り立っています。その献身的な介護には本当に頭が下がります。訪問看護師は、週に1～3回の訪問で短時間の滞在でしかなくお役に立てているのかと不安に思うこともあるのですが、「看護師さんが来てくれるからやっていけるの」という言葉に励まされ、後押しもされスタッフみんなで頑張っている毎日です。

☆

これからも、在宅で安心して生活するためのお手伝いを、代々木病院、外苑診療所はもちろんのこと、ケアマネジャーさん、ヘルパーさんなどとの連携を強め発展させていけたらと思います。

手術台

被爆者は言う。私たちを三度殺さないで…と。三度目の死とは「私という被爆者がいたということが忘れられること」である。その叫びに応えようとする運動が始まっている。「ヒバクシャを世界遺産に！」キャンペーンである▼ユネスコの世界遺産事業はよく知られた世界遺産のほかに「世界の記憶・記録遺産」「無形遺産」と三つある。「被爆の体験・その後の苦難の人生、核廃絶との戦い」の決定版を映像で、文章で、声でまとめて人類に残そうとする企てである▼だが人手・資金ともに乏しく、なりよりも時間がない。あと5年で正確に語れる被爆者は死んでしまう。唯一の二重被爆者（広島・長崎双方で被爆）山口彊さん、松本で食堂「ピカドン」をやっていた前座良明さんと次々亡くなっていく▼被爆者運動の象徴的存在であった山口仙二さんも病に伏している。時間のなさをカヴァーできるのは潤沢な資金と人手である。是非、このキャンペーンに力を貸して欲しい。特に若者達の参加を期待したい。（ま）

＊

「被爆者と世界遺産にキャンペーン」連絡先
四谷法律事務所　03―3341―1417　池田眞規